

ドローイングを手立てとした大学の絵画授業における SNS利用の可能性とその効果についての実践的考察 I

— 自他作品の相互共有を通して促進される省察の深まり —

小澤基弘	埼玉大学教育学部美術教育講座
八桁健	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
有原穂波	埼玉大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修

キーワード：絵画教育、ドローイング、SNS、省察、自他理解

1. はじめに

教員養成学部美術専修における絵画実技授業の目的は、単に技法や技術の習得にあるのではなく、「自己表現」とは何かを自問し、そこから自己理解を獲得し深めるための手立てとしてあることは言を俟たない。自分は何を表現するのか、自分は一体何を表現したいのか、絵画ひいては美術表現とは常にこのことへの問いかけであり、そのときどきの「表れ（作品）」はそうした問いへの答えを内包している。絵画（美術）表現を自己理解のための手立てと考えた場合、他者の絵画や表現の在り様をも同時に知ることは、他者理解へも直結すると考えられる。大学における絵画の授業では、自作を探る（自己理解）と同時に、他者の作品の在り様もまた共有する（他者理解）絶好の機会ともなり得るのである。

絵画制作を通して自己の表現とは何かを知ること、つまり自己理解を促進し、同時に同じ空間を共有する他者の表現を知りたい欲求が芽生えることによって、他者理解もまた促進される。そうした自他理解の相乗効果が、やがて学生が学校教員になった際に、児童・生徒を本源的に理解する力を培うことになることは必至であろう。以上の前提に立って、筆頭著者は大学での絵画授業を展開しているところである。

本誌において筆頭著者及び執筆分担者は、これまで数年に渡りドローイングを軸とした教育学部3年生向け絵画実技授業（「絵画応用実技 I」）について、その授業効果の検証を認知科学的観点から行ってきた（小澤、八桁、2012・2013・2014）。平成26年度の本授業では、これまでの授業方法に加えて、毎回の授業後にその週に描いたドローイングの全画像を各自撮影し、授業感想を書き加えてSNS(Facebook)上の指定されたWebサイト（「S大学絵画応用実技 I用サイト」：受講生以外にはクローズされている）にアップロードすることを新たな課題の一つとした。それによって、授業時間内では難しかった受講生相互の意見交換をそのWebサイト上で自由に行うことが可能となり、また授業時に鑑賞した自作及び他者の作品を再度振り返って見つめ直すことも可能となった。また授業感想をそこに書きこむことにより、各受講生が教師との対話後何に気づいたか、その結果次のドローイングをどのように方向づけようとしているのか等々もまた、そこに言葉で留められることにもなり、それを他の受講生も読むことができる。もちろん教師はそれぞれの感想に対して適時コメントをすることも可能である。

以上のように、授業外においてもSNS上で自作及び他者の作品を必要に応じて振り返って鑑賞

でき、また自作のこれまでの経緯を遡って振り返ることも可能であると同時に、他者のそれをもまた継時的に追うことができることになる。このような授業外での主体的なSNSへのアクセスは、確実に受講生各自の制作モチベーションを高めていき、自己理解そして他者理解を促進することになるだろう。

また、平成26年度、筆頭著者は教員養成の教育学部ではない一般総合大学（T大学）でも同様の実技授業（「ドローイング表現研究Ⅰ」）を非常勤で行っており、S大学と同様に毎週のドローイング作品画像と授業感想を、SNS上のT大授業サイトにアップロードすることを課題とした。同一大学だけではなく、専門を異とする複数大学間で同時に同じ内容の授業を行っているメリットを今回は活かそうと考え、S大サイトとT大サイトは相互に閲覧可能とした（各Webサイトはあくまでこの二校の受講生以外にはクローズされている）。S大生はT大生のドローイングや彼らが何を考えて描いているのかを知ることができ、同様にT大生もS大生のそれを知ることができる。つまり、同一大学の受講生間だけではなく、異分野間の学生の抱く問題意識や表現主題をもSNSを介して共有でき、そこから様々な気づきをお互いが得ることにもなる。そうすることで更に両大学の受講生の制作に対するモチベーションや理解は高まるはずであろうし、また作品を介した他者理解も確実に促進されることになると思う。

本稿は、制作の動機付けを高めるためのSNS活用の在り方とその可能性を探ること、またその効果検証を趣旨としており、平成26年度前期の授業（日々のドローイング制作とその省察を趣旨としている）におけるSNS活用の在り方とその効果検証を旨としている。もちろんSNS活用は後期授業においても継続的に行っていく。後期は「作品化」を目的とした授業となり、毎回の授業では各受講生の制作プロセスが授業対話の主題となる。それらもまたWebサイト上にアップロードして相互に閲覧可能としたが、後期授業における効果検証については、次年度に引き続き行う。

尚、本稿執筆に際し、第一著者が「1. はじめに」「2. SNS活用にいたる経緯」「4. まとめ」を執筆し、第二・第三著者が「3. SNS上でのやりとりの実際」を分担執筆した。

2. SNS活用に至る経緯

2-1 本授業の概要

本稿を始めるに当たり、まず筆頭著者が行っている絵画授業「絵画応用実技Ⅰ」について、その概略を説明しておく。本授業は教育学部美術専修3年次生向けの通年授業である。

本授業で筆頭著者が将来図工・美術科の教員となる受講生に培いたい力は、自分にとって「表現とは何か」ということ、つまり自分にとっての「表現することの意味」を主体的に自覚すること、そのための力の獲得である。それは本源的に言えば、「自分とは何か」その諸々を理解しようとする自己探索欲求への開眼とも言えるだろう。また、同時に他者の表現を自分のそれと照らし合わせながら相対化できる力の獲得も、この授業を通して期待したい。それは他者理解を前提とするものであり、自他間のコミュニケーション力の獲得につながる。つまり、自己理解力と他者理解力の双方の獲得こそが、本授業で受講生に培いたい力であり、それは将来教員として児童・生徒に向き合う際に、真っ先に必要とされる根源的な教師力であると思う。

以上の意図に従って筆頭著者は本授業を進めている。まず前期では、受講生各自の「自分は一体なにをどう表現したいのか」、つまり各自の表現の在り様について、日々の「ドローイング」（ドローイング日記）を手立てとして探り、毎回の授業時に教師及び他の受講生と共にドローイング

を介して話し合う中から、主体的にそれを探り見出していくことを目的としている。要するに受講生が自分自身の「表現の核」に気づき、それを漠然とでも自覚化できるようにすること、それが前期授業のねらいである。ドローイングとは、一言で言えば「主観的素描」である。対象の観察を旨とし、その情報を二次元に描き表す「客観的素描」と言えるデッサンとは異なり、観察を起点としながらも、対象に捉われるのではなく、そこから得た感覚や感情、記憶、その他諸々の内的なイメージを、即興的に描き表した素描と言える。外界の刺激を経て内発した即興的なイメージを、短時間の間に率直に描き出すことによって、自分自身の内面の赤裸々な情報が画面に留められることとなる。単に描き出すだけではなく、それらを受講生自身が深く省察すれば、自分の表現の中核をなすものが何であるのかに気づくことになるだろう。本授業前期では、このように日々のドローイング制作を中心課題に据えて、毎日のドローイング表現と毎回の授業時における対話を通して省察の往還を通して、基本的には進められていくことになる。

後期では、前期のドローイングを通して気づいた自身の表現の在り様や方向性を、他者に伝えられるかたちで表すこと、つまり「作品化」を主題としている。前期で得た自身の表現の核に対する漠然とした思いや気づきを、他者にコミュニケーション可能な形態に翻訳していく力が、美術表現学習には求められる。それを「作品化」と捉え、後期授業は主体的に試行錯誤しながらそれを実現させてゆくのである。学生は自身の表現主題を、どのような方法でどのように表すことが相応しいのか、一点の「作品」に結実していく制作プロセスの諸段階を、常に写真で記録したり言葉で書き留めたりし、毎回の授業時に制作過程の実作とそうした記録ドキュメントを示しながら、教師及び他の受講生とともに次に何をすべきかを思考していく。最終的に自身の納得のゆく「作品」を実現し、授業作品展として展示するとともに、その場で最終発表を口頭で行う。

以上が本稿で扱う絵画授業「絵画応用実技Ⅰ」の授業概要である。前期・後期を通して、自分自身にとって「表現とは何か」ということに自覚的になり、その気づきを「作品」として具体的に表すこと、それは受講生が自分自身の表現の核を明確に自覚すること、つまり自己理解を探り深めることである。また同時に、自分の主題や主張を他者にいかに適切に伝えられるか、つまり他者とのコミュニケーションについて考え、それが適切になされるためにはどうすればいいのか、それを可能としていく力を養うこと、それが本授業1年間を通しての授業主題である。

2-2 受講生による授業感想のなかから

前述のように、筆頭著者は本授業の効果についての授業研究をここ数年に渡って続けてきており、そのために授業で生じている全ての出来事の記録を採り続けてきた。授業記録とは、まずは全受講生の毎回のドローイング画像、授業時の対話内容（音声記録）、そして毎回の授業後の感想（データで提出させている）と授業終了後のレポートである。今年度のSNS活用の発想は、平成25年度までに出された授業感想記録の中で、多くの受講生が他の受講生のドローイングについての感想を書き記しているという事実を起点としている。例えば以下のような感想である。

- ・ Bさんのドローイングが面白いと思いました。非常ベルがたくさん並んでいる絵と、警備員の前にメルヘンな世界が広がっている絵に、私の知っているBさんらしさを感じました。彼女は最初、手形をたくさん集めたりペンで模様を描いたりして〈楽しい〉と言っていましたが、今回のドローイングにはよりストレートな〈楽しい〉が出ていたような気がします。
- ・ Iさんは普段おとなしいのにあんなに強い印象の物を持ってきて意外だったけれど、そういえば

時々垣間見えていたのかもしれないあと、友人の新しい一面にびっくりしました。

- ・犬が電柱に繋いでいる絵にすごく惹かれました。描いた方はあまり深く言及しませんでした。とても興味深くてできればあの絵について話を聞きたかったです。

こうした類の授業感想は枚挙に暇がない。この授業は各受講生が教師と対話をしていく形態であり、他の受講生はそれを聴くことはできるが、限られた時間内で数多くの受講生と対話をする必要があるため、各自がそれぞれについて自由に感想を述べ合うことは物理的に不可能である。それ故に、授業感想で受講生は自分の心に触れた他者の作品について上記のような感想を書き記しているのである。上はほんの数例に過ぎず、本当に多くの受講生が自分の作品だけでなく他者の作品にも心を動かされたり興味を示したりしている。そのことは感想を提出された筆頭著者には伝わるが、発せられた受講生本人にはこれまで十分に伝わらなかった。

こうした好意的な感想は、もし伝えられれば本人にとって大きな自信となることは必至であろう。こうした相互の作品感想を伝え合い共有することは、各自の表現の展開に極めて大きな効果があるはずである。また、先述の通り、平成26年度は筆頭筆者は本拠地のS大学の他に、一般総合大学(T大学)においても同様の授業を行っているため、専門の異なる様々な受講生が相互に作品を鑑賞できる環境を与えられないものかと考えていた。S大学で美術教育を専門とする学生と、T大学のような総合大学で多種多様な専門を学ぶ学生とが、たとえ実際の授業で出会わなくとも、SNS上で画像や感想をお互いに知り合い共有することによって、何かがスパークするのではないかと推察した次第である。

またもう一つの理由としては、本授業は3年次生向けの授業であり、前期途中でS大学の受講生のほぼ半数が教育実習に行かねばならない現実がある。つまり、途中約1か月程度この授業に出られない受講生が出てくるのである。もちろんその間は教育実習に専念しなければならないのであるが、もしSNS上に授業サイトを設けておけば、そこにアクセスすれば実習の空き時間等に授業を継続している受講生のドローイングの様子をうかがい知ることができるだろう。教育実習による授業中断の問題は、3年次生の授業進行において長年の懸案事項であったが、SNSを活用すれば教育実習後に授業復帰する際、1か月間の不在による授業ギャップをさほど感じないで済むのではないかと考えたわけである。以上の2点が平成26年度授業においてSNSを導入した大きな動機であった。

3. SNS上でのやりとりの実際

ここからはまず、実際に行われたSNS上での学生相互のやりとりについて具体的事例を見てゆく。前述のように、今年度は筆頭筆者はS大の他に一般総合大学であるT大学においても全く同一内容の授業を行った。そしてこの二校の受講生はお互いにSNS上のWebサイトを共有可能としたので、相互に作品や考え方を共有し、相互に刺激を与え合っていることがよく理解される。例えば以下のようなケースである。

3-1 同一大学内でのやりとり

以下の①と②のケースは、同じ大学の受講生同士の意見交換の例である。①(図1)はS大生

のT.Yさんがその週に描いたドローイングのなかから気に入った一点を同じS大生のM.Sさんが選び出してそれについてコメントし、それに対して作者のT.Yさんが答えているやり取りの例である。また②(図2)は、T大生のA.Sさんの作品に対して同じT大生のS.Aさんが感想を伝えている。こうした類の感想は、実際の授業現場では伝える機会が殆どなく(受講生一人一人との対話で進行する授業であるので)、それ故にSNS上で初めて率直にこうした感想が伝えられることが可能となるのである。

① S大学生間のみのやり取りの例



図1

② T大学生間のみのやり取りの例



図2

次に③(図3)と④(図4)は、受講生と授業者及び授業補助者であるTA(Teaching Assistant)との3者のやり取りの例である。このように筆頭筆者は、全受講生がSNS上に感想と作品をアップロードした際になるべく迅速にそれに対する短いコメントを行うように努めている。学生相互のやり取りだけではなく、既に一度授業の際に対話の中で語った内容であっても、授業者が再度このようにSNS上で文章化して伝えることで、受講生にはアドバイスがより深く定着するようであった。

3-2 二校間でのやりとり

⑤(図5・図6)のケースは、S大とT大両大学間相互の受講生の感想交換の例である。相互の受講生は授業で直接作品を見ているわけではないが、SNS上にアップロードされた作品画像と感想文からだけでも、ある程度作品の相互鑑賞が可能であることがわかる。アップロードされた作品画像と感想はS・T両大学の受講生全てが閲覧可能であり、彼ら彼女らはそのなかから自分が気になるものを選択し、それについて随時コメントしているのである。また、図5ではS大のY.Aさんの作品に対して、同じくT大のF.M君がコメントしている。T大生は総合大学であり表現

③ S 大学生と教師及びTA間でのやりとりの例



図3

④ T 大学生と教師及びTA間のやり取りの例



図4

の具体的方法については十分な経験がなく、そうした点について美術教育を専門とするY.Aさんに素朴に質問を投げかけており、その質問に端的にY.Aさんが「模写」という考え方をを用いて答えている様子がうかがえる。また、図6ではS大生K.Nさんの作品について、T大生のF.M君がその技法について質問をしている。その質問に対して、K.Nさんは丁寧にその技法について具体的に写真を用いて説明をしている。このように普通の授業だけではやり過ぎられてしまう場合が多い「個々の作品がどのように描かれたのか」、つまりその技法や表現に対する受講生の素朴な疑問

⑤ S大学生とT大学生間でのやりとりの例



図5

⑤ S大学生とT大学生間でのやりとりの例



図6

が、SNS上でのやりとりによって相互に投げかけられ、画像を伴うことで具体的な解決を見ることにもなるのだ。

3-3 授業対話だけでは伝えられない自分の考えや思いを表明している例

⑥ (図7) の例のように、授業時の対話では語り尽くせなかった自分の思いや考え方を、授業者に投げかけSNS上でのやりとりを続けた例も多々あった。実際の授業時において、受講生は自分の考え方や思いを教師に全て伝えられるわけではない。全受講生を前に対話が進められるため、自分の赤裸々な思いを全てそこで語り尽くすことに抵抗のある学生が多々いる。こうした授業時に語れなかった思いや考えも、SNS上では伝えられるようであり、この⑦のケースにあるように、授業時に語り切れなかったこと、そして授業の場で語るにはかなり抵抗のある自分の思いを吐露している。それに対して授業者は、こうした思いに対して可能な限り寄り添った見解をここに記している。こうしたやり取りを通して、受講生は次になにをどのような気持ちでやればよいのか納得をし、制作を継続していくことになるのである。

以上、主だったSNS上でのやりとりのケースをここに記した。こうしたやりとりは枚挙に暇がない。これらはおそらく全受講生が目を通していただろうと思われる(「表示済み」欄の数を見ればそれとわかる)。たとえ他者のやり取りであっても、同じような悩みや疑問を抱いている受講生もおり、そうしたやり取りが思いがけず自分自身の次の制作のための重要なヒントになることもあり得るのである。つまり、SNSを介して授業後にそれを通観することは、授業での対話と同等、いやそれ以上に教育的な意味があると言えるのではないだろうか。

毎回の両大学の授業後に、このWebサイトへの画像及び感想のアップロードと同時にこうしたやりとりが始まるのであるが、授業者は出来る限り迅速にこの両Webサイトにアクセスし、受

⑥ T大学生と教師間でのやりとりの例

A.S

6月22日

遅くなりすみません。



今週は、とにかく色んなことをしてみようと思い、スケッチや、歌詞へのイラスト付けをやってみました。




歌詞はBUMP OF CHICKENのHAPPY です。

スケッチはいまいちでした。歌詞は楽しく描けましたが、イメージを表現しきれない部分もありました。

それから、先週、先生とお話した際、「マーカー、色鉛筆、水彩絵の具、クレヨン、パステル、どれもじっくりこないんです」「今挙げたもの、全部試したの?それとも頭で考えてだめだと思ったの?」という会話がありました。このとき私はいつもの取り繕う癖が出て、「全部試しました」と答えてしまいました。でも後でふりかえって、絵の具をしっかりと試していないと反省し、絵の具を使ってみました。絵の具の上にマーカーや色鉛筆を使って二枚描きました。でもいまいちしくり来ず、絵の具だけでも二枚描いてみました。こちらは比較的じっくり来ました。

それから最後の二枚について。アートセラピーの本を立ち読みし、「嫌いな自分のイメージと好きな自分のイメージ、そしてそれをつなぐようなイメージを描こう」というエクササイズを試してみました。嫌いな自分のほうはさっさと描けましたが、好きな自分というもののイメージが全くと言っていいほど浮かばず、こちらは未完成で終わっています。というわけでそれらをつなぐイメージも描けませんでした。

いいね!・コメントする

👍 さん、さん、さん、他2人が「いいね!」と言っています。 ✓36人が表示済み

教師 嫌いな自分はイメージできても好きな自分がイメージできないという事実は結構意味深いですね。簡単に考えれば、嫌いなイメージの対極を描けばいいのかもしれませんが、自分を好きになることは確かにそうは感嘆にはいかないかもしれませんが、表現の最終目的はたぶんそういうself-esteemの自然な獲得なのかもしれませんよ。そう思います。

6月22日 20:58 · いいね!

教師 上の欄の「感嘆」は「簡単に」の間違いです。すみません。

6月22日 20:58 · いいね!

A.S 嫌いなイメージの対極...言われてみればそうですね、当たり前なようですが目から鱗です。先生のおっしゃる通り、self-esteemの獲得は私も大事だと思っています。人を大切にするためには、自分を大切にすることが必要で、自分を大切にするには、自分を愛することが必要なのだと思います。

6月22日 21:39 · いいね! · 👍1

図7

講生の感想に対して適切なコメントを返すように努めている。なぜならば、授業者のコメントが発火点となり、それによって他の受講生がコメントしやすくなる場合が多いからである。更にSNS上の多種多様なやりとりの例を掲載したいが、代表的な例を挙げたこのあたりで割愛することとする。それらのやり取りを見ていると、授業時での対話以上に濃密な自分自身の表現への省察、そして他者のそれへの省察が、SNSを活用することによって促進されている様子が見て取れるのである。

4. まとめ

SNSを活用した絵画授業の効果についての具体的な検証は、これから始めるところである。本稿ではまずその運用及びやり取りの実際を簡潔に紹介し、この活用の可能性を提起するに留めた。既に授業後のレポート課題のなかで、このSNSに関わる言及が幾つか見られている。例えば次のような一文である。「また、他の人の影響も多く受けた。授業だけでなく、Facebookで色々な人のドローイングをじっくり、言葉と共に見るのができたことは、とても楽しかった。描いている人が透けて見える気がして、楽しむことが出来た」(T大Y.Sさんの前期レポートより抜粋)。同様の言及は、他の幾人かのレポートにも見られる。今後も同授業においてSNS利用を継続し、内容を改善するとともに活用効果の検証を行い、多角的な視点からその効果の有効性を明かしていく予定である。

注

1. 本研究は、科学研究費補助金：基盤研究（A）「教育系大学の図工・美術科教員養成における創造性育成支援プログラムの開発」（課題番号：23243087）の助成を得て進められている。

引用文献

- 小澤基弘・岡田猛（2012）「教員養成学部の絵画教育における省察的実践に関する研究Ⅰ：ドローイングを主題とした新しい教育実践とその分析枠組みの提案」『大学美術教育学会誌』第44号、pp.207-214
- 小澤基弘・岡田猛・八桁健（2013）「教員養成学部の絵画教育における省察的実践に関する研究Ⅱ：授業におけるドローイングを介した対話と表現の継時的変遷の分析から」『大学美術教育学会誌』第45号、pp.151-158
- 横地早和子・八桁健・小澤基弘・岡田猛（2014）「教員養成学部の絵画教育における省察的実践についての研究Ⅲ：授業アンケートによる授業実践の効果の検討」『美術教育学研究』第46号、pp.285-292

(2015年2月23日提出)

(2015年6月3日受理)

The Practical Approach for the Self-Reflection at Drawing Class of Two Universities through the Practice of Communication by way of SNS :

reflection promoted by the mutual possession of individual drawings

KOZAWA, Motohiro

Faculty of Education, Saitama University

YAGETA, Ken

The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

ARIHARA, Honami

Graduate School of Education, Saitama University

Abstract

It is very important for the students of faculty of education to learn independently what their expressions are from the process of seeking and confronting them by way of drawing. We consider that students could understand in future what the expression of each child would be if they strongly can feel conscious about what their own expressions are. We now practice the method of introducing SNS (facebook) into the drawing class for realizing this purpose. At the class on every Wednesday, each student and I (Kozawa) talk about his or her drawings face to face, and after the class I assign each student a duty of updating at the special folder for this class on SNS the images of all drawings of this week and the short comment of his or her awareness of expression. Every student at this class can access this folder freely and can get to know what other students are thinking about their expressions. They can exchange their opinions at that folder freely out of the time of class and so they could facilitate the progress of their self-reflections of expressions. This kind of communication and empathy through SNS might be effective for the next motivation for each student's drawing.

Keywords : painting education, drawing, SNS, self-reflection, mutual-understanding